



やんぶし(山伏し)屋敷

ずっと昔の頃、高鍋の領主伊東氏が、農業振興のため牛牧に牧場を開いていました。牧場は、牛牧を中心に唐木戸付近までで、大変に広いものでした。まわりは木を使つて柵をつくりかこんでありました。

牧場には牛を放牧していましたが、今のよう大きい牛でなく、姿・形が小さくかわいい牛で“やぶこぶり牛”といっていました。

牧場には数名のやんぶし(山野に寝起きして修行する僧)がいて、道場をたてて住みこみ、修業のかたわら牛の世話をしていました。それが今も残つていてやんぶし屋敷の跡といわれています。

その頃、やんぶし達は、お昼近くになりますと外へ出て、首からつるした大きなほら貝を口にあて、ボーッ、ボーッ、と吹き鳴らすのです。広い牧場に散っていた牛はその音を耳にすると、あちらの山陰、こちらの森の中からぞろぞろとやんぶしの立つている寄せ場に集まってきます。集まって来た牛は用意された草をはみ、腹がふくれるとそれぞれ横になって反すうするのでした。

やがてやんぶしは、又もやほら貝を吹き鳴らします。牛達はほら貝が鳴りはじめると次々に起き上がり、木戸(出入口)の方へ列をつくって進んでいきます。やんぶしが木戸口の柵を開きますと、集まってきた牛は待つていたように外に駆け出し、小道に沿って南の方を目指して

うしろへ





歩き出すのです（この木戸のあった付近が唐木戸です）。

途中やんぶし達は、時々ほら貝を口にあて、ボーツ、ボーツ…と牛を追いたてながら進んでいくのです。やがて着いたのは宮田川のほとりです。やんぶし達は牛に水を飲ませながらゆつくりと休そくを与えるのです。

小半時（約30分）を過ぎる頃に、又もやほら貝を吹きはじめ帰り支度にとりかかります。牛はもときた道を、勝手に草をはみながら牧場を目指してもどつていきます。やんぶし達の吹くほら貝の音は、行きも帰りもまことにのどかで、近郷近在に鳴り響き、人々の心をなごめるのに十分でした。

こうしたことが毎日毎日繰り返されていましたが、いつのころからか、この付近一帯を牛牧というようになってそうです。

（採話…中尾 岩切久江）



大蛇がいた話

高鍋町上江の、大戸口（谷坂の脇）に、三段構えで造られた、古い池があります。これは、かんがい用のため池として造られたものですが、現在は利用されていない様です。

ところが、この辺を中心として、野首から牛牧にかけて大蛇が住みついていた、ということでした。今、70才から、80才代の方々の話では、この話を古老から聞いたといわれる人を、2、3に止まらず聞きました。

この大蛇の大きさを確かめることは難しいが、大蛇が通った後は、草木がなぎ倒されて、大きな道がついたということでした。それ程大きな蛇だったのです。

本気で、この話をしてくれた人々も「私は見た」という人には、会うことが出来ませんでした。

今の若い人達には、話題にもなるまいし、いつの間にか、忘れられることの様に思われます。

※昭和50年頃のこと、郷土史家の中武弘氏が、この付近に探索にいかれた折、突然奥の方で、ザー、ザー、ザー、ザーと、不気味なすこい音が聞えてきたのです。仰天された氏は、とるもとよりあえず、そのまゝ、急いで帰られ、その後、二度とその付近に足を運ばれたことがないそうです。

「確かに、あれは大蛇でしたよ」と、豪快な氏も、首をすくめて、語っておられました。

（採話…脇 押条磯松）

